

ギルバート・ホワイト『セルボーン博物誌』の魅力

門 井 昭 夫

The Fascination of Gilbert White's *The Natural History of Selborne*

Akio Kadoi

抄 録

18世紀後半にイングランド、ハンプシャーの片田舎のセルボーンで書かれたギルバート・ホワイトの『セルボーン博物誌』が今日まで広く読み継がれてきている理由は何か。当時書かれた博物誌は他にもいくつかあるが、この博物誌のみ生き残って、今なお読者を引きつける魅力は何かを考察する。その魅力を構成するのは第一に対象を根気よく、長年にわたってよく観察し、それを巧みに描写しているところにある。次に、古典の教養に裏打ちされたホワイトの文章が律動的で音楽性に富み、明快で親しみやすく、単なる自然観察記ではないという特徴がある。ホワイトは言葉の目利きで、短い平凡な名詞、単音節の形容詞を重ねて使う一方、文章が単調になるのを防ぐために適宜多音節の語を交えるなどして生彩のある表現を心掛けている。その根底にはホワイトの性格が穏やかで几帳面、生きるものに対して温い心を抱き、実証的研究態度の持主であるということがある。

キーワード：ギルバート・ホワイト

『セルボーン博物誌』

博物誌

自然誌

18世紀

はじめに

ギルバート・ホワイト (Gilbert White, 1720–93) はイングランドのハンプシャーの小さな村セルボーンで生涯のほとんどを過ごした牧師で、『セルボーン博物誌』を著したことで知られる。『セルボーン博物誌』の正式のタイトルは *The Natural History and Antiquities of Selborne* であるから、『セルボーン博物誌と古誌』(初版の扉にある出版年は1789となっているが、実際には1788年12月に出版された) である。しかし、「博物誌」の部分の持つ普遍性が、地域と時代の限られた内容の「古誌」の普遍性に勝るため、今日では「古誌」の部分はほとんど除かれ、『セルボーン博物誌』として広く読み継がれて、世界的古典となっている。各国語にも翻訳され、わが国では数種の翻訳がある。

『セルボーン博物誌』はホワイトが1751年から記し始めた「園芸日誌」(*Garden Kalendar*)、後に「博物日誌」(*Naturalist's Journal*) となった季節変化の詩的記録を資料にして、知り合いになった有名な動物学者のトマス・ペナント (Thomas Pennant) と博物学者のデインズ・バリングトン (Daines Barrington) に宛てた手紙を、それぞれ年月日順に配列して一書に纏めたものである。したがって『セルボーン博物誌』はこれら二つの日誌の観察記録のエッセンスと言える。

18世紀の時代が進むにつれて地方の聖職者たちは、教区の税金と教会付属の畑から上がる利益によって、安楽な生活を送っており、時間的余裕があった。彼らの中には飲酒にふける者、狐狩り、地方行政に身を入れる者などがいたが、学問研究に専念する者も少なからずいた。ホワイトは余暇を自然研究に利用した代表者の一人である。当時は自然探究の機運が盛んで、キャプテン・クックの世界周航を始めとして博物誌の類も他に書かれた。例えば南米を訪れたウォータトン (Charles Waterton) は博物誌を書いた一人だが、今日それを読む人は稀である。それに対してホワイトの『セルボーン博物誌』が若き日のチャールズ・ダーウィンや W.H. ハドスンらに強い影響を与え、一般の人々にも魅力ある博物誌として今日まで広く読まれている理由は、一つには観察した事実を描写するホワイトの文章にあると考えられる。本稿ではこの博物誌の魅力をその描写の仕方、文章表現に主眼を置いて具体例を示しながら考察する。

1. 的確で巧みな描写

ホワイトの自然研究は広範囲にわたり、最も多く言及されている対象は動物、とりわけ鳥類への関心が深い。他に哺乳類、魚類、爬虫類、両生類、昆虫への言及も非常に多い。さらに植物、気象、地質・鉱物と、自然研究がまだ分化していない時代の総合的研究であり、自然誌 (natural history) である。

ホワイトは穏やかな性格で忍耐強く、探究心が旺盛であった。自然現象、また自然界に展開する生命の営みに対して素直に驚き、真に畏敬の念を抱いており、見つめたものの中に美を見出していた。押付けがましいところがなく、少しも偉ぶらず、説教調のところは微塵もない。伝える情報内容には人間味があった。

秋の夕方、ねぐらに着く前のミヤマガラスの行動をホワイトは次のように描写する。

The evening proceedings and manoeuvres of the rooks are curious and amusing in the autumn. Just before dusk they return in long strings from the foraging of the day, and rendezvous by thousands over Selborne-down, where they wheel round in the air, and sport and dive in a playful manner, all the while exerting their voices, and making a loud cawing, which, being blended and softened by the distance that we at the village are below them, becomes a confused noise or chiding; or rather a pleasing murmur, very engaging to the imagination, and not unlike the cry of a pack of hounds in hollow, echoing woods, or the rushing of the wind in tall trees, or the tumbling of the tide upon a pebbly shore. [D. B. (=To Daines Barrington), LIX]

秋、ミヤマガラスの見せる夕方の行動は不思議なものであり、愉快なものでもあります。薄暗くなる直前に、ミヤマガラスは一日の餌捜しから列を成して戻ってきて、セルボーン丘陵地の上空に何千と集まり、空中でぐるぐると旋回し、戯れ、ふざけた格好で急降下します。その間中、声を出して、高らかにカーカーと鳴きますが、その声は、村にいる私たちが彼らのはるか下の方にいるため、混ざり合い、弱められて、ごちゃごちゃになった騒音または叫び声となります。あるいはむしろ、快いささやきとなって人の想像力を大いに引きつけ、谷間にいる一群の犬の吠え声に似て、森にこだまし、あるいは高い木に勢いよく吹きつける風、または小石の多い浜辺に砕ける潮のように聞えます。[バリングトン宛第59信]

ミヤマガラスの大群が日暮れ時に繰り広げる空中でのふざけ合いの情景が眼に浮かび、さざめきが聞えてくるような描写である。カンマが多く、長いセンテンスではあるが、やさしい語を用いて直截に表現しており、きびきびとした感じを与える。

夕方のこの儀式が済むと、ミヤマガラスは近在の深いブナの森に引き上げる。これに関してホワイトはある少女のことに触れる。その少女は寢床に入ろうとしているときに、「ミヤマガラスがお祈りをしていると、自然神学の真の精神でよく言っていた」ことを思い出す。「ところが、この子供はあまりに幼すぎて、万物創造の神について聖書に『(主は) 神を求めるミヤマガラスに餌を与えられる』とあるのを知っている訳ではないのです」と旧約聖書の詩篇の一節にさりげなく言及してこの書信を締めくくる。この少女はホワイトの姪のことであると言われているが、ほのぼのとした温かさを感じさせる挿話である。

ホワイトは初めは叔母のスヌーク夫人(Rebecca Snooke)に飼われていたリクガメのティモシー(Timothy)が冬籠りのための穴掘りをする様子を次のように描く。長いので、途中を一部省略して引用する。

It scrapes out the ground with its fore-feet, and throws it up over its back with its hind; but the motion of its legs is ridiculously slow, little exceeding the hour-hand of a clock. . . . No part of its behaviour ever struck me more than the extreme timidity it always expresses with regard to rain; for though it has a shell that would secure it against the wheel of a loaded cart, yet does it discover as much solicitude about rain as a lady dressed in all her best attire, shuffling away on the first sprinklings, and running its head up in a corner. If attended to, it becomes an excellent weather-glass; for as sure as it walks elate, and as it were on tiptoe, feeding with great earnestness in a morning, so sure will it rain before night. [D. B., XIII]

カメは前脚で地面をかきほじり、後脚で背越しに土を放り上げるのです。けれども、その脚の動きは滑稽なくらいに遅く、時計の短針の動きとほとんど変わらないほどです。…雨に対していつも示す極端な気の弱さほど、このカメの行動の中でこれまで私に強く印象づけたものはありません。カメは荷を積んだ馬車に轢かれても身を守る甲羅を持っていますが、晴れ着に着飾った婦人のように雨には大変気を遣い、雨がぱらぱらと降ってくるや脚を引きずって歩き出し、頭を先にして隅の方に潜り込むのです。もしも注意して見ていれば、このカメは素晴らしい晴雨計になります。というのは、カメが意気揚々として歩き、有頂天で、朝のうち一心不乱に餌を食べるなら、夜にならないうちに必ず雨が降るからです。[バリングトン宛第13信]

ホワイトがリクガメの行動の一挙手一投足を注意深く観察し、ユーモアを交え、比喻を用いて表現するとき、そこにはホワイトのこの動物に対して注ぐ眼差しの温かさが感じられるのである。

ホワイトはツバメの生態と行動について深い関心を抱いていた。イギリス産のツバメ類の中で一番小さな種であるショウドウツバメ (sand-martin or bank-martin) の群生地について記し、営巣地については大きな池沼や川の畔を好み、特にテムズ川のロンドン橋の下流の何箇所かの堤防に群れを成して棲んでいることはよく知られている、と述べている。それに続けて、どのような巣を造るかが記される。

It is curious to observe with what different degrees of architectonic skill Providence has endowed birds of the same genus, so nearly correspondent in their general mode of life! For while the swallow and the house-martin discover the greatest address in raising and securely fixing crusts or shells of loam as *cunabula* for their young, the bank-martin terebrates a round and regular hole in the sand or earth, which is serpentine, horizontal, and about two feet deep. At the inner end of this burrow does this bird deposit, in a good degree of safety, her rude nest,

consisting of fine grasses and feathers, usually goose-feathers, very inartificially laid together. [D. B., XX]

同じ属の鳥で、しかも一般的な生活様式がほとんど似ている鳥に、神は何と程度の異なる巣造りの才をお与えになったのかを観察するのは興味深いことです。と申しますのは、ツバメとイワツバメとは雛の揺籃として壤土で出来た外殻を造り、安全に固定する際に最高の技術を發揮しますが、ショウドウツバメは砂か土の中に円くて整った穴をうがつのですが、その穴は曲がりくねり、水平で、約20フィートの深さがあるからなのです。この穴の最奥に、ショウドウツバメは粗末な巣を相当程度安全に置くのですが、その巣は非常に無造作に並べられた細い草と羽毛、通常はガン・カモ類の羽毛で出来ています。[バリングトン宛第20信]

ツバメの仲間でも種によって巣の造り方に違いのあることを、ホワイトは細かく比較している。ホワイト自身が非常な興味を持って観察し、ショウドウツバメの巣穴の中を最奥まで調べている。対象に迫る真摯な探究心には野外の博物学者を認ずるホワイトの面目躍如たるものがある。息の長いセンテンスが連なるけれども、決して読みにくいということではなく、明快である。

ホワイトは鳥の行動に深い関心を抱いていたが、他のどんな鳥にもましてヨタカの行動を詳しく研究した。ヨタカはホワイトにとって驚くほど好奇心をそそる鳥であった。ホワイトはヨタカの鳴き方、木の枝に止まる姿勢などについて熱心に観察し、発見をする。

I have always found that though sometimes it may chatter as it flies, as I know it does, yet in general it utters its jarring note sitting on a bough; and I have for many half an hour watched it as it sat with its under mandible quivering, and particularly this summer. It perches usually on a bare twig, with its head lower than its tail, in an attitude well expressed by your draughtsman in the folio *British Zoology*. . . It appears to me past all doubt that its notes are formed by organic impulse, by the powers of the parts of its windpipe, formed for sound, just as cats purr. . . one of these churn-owls came and settled on the cross of that little straw edifice and began to chatter, and continued his note for many minutes: and we were all struck with wonder to find that the organs of that little animal, when put in motion, gave a sensible vibration to the whole building! [T. P. (= To Thomas Pennant), XXII]

ヨタカは、私も知っておりますように、時々飛びながら鳴くことがありますが、ふつうは木の枝に止まりながらキーキーという鳴き声を発することに私は始終気づいておりました。そして下嘴を震わせて止まっているその鳥を、私はたびたび半時間もじっと観察してきましたが、とりわけこの夏はそれを行いました。ヨタカはたい

てい葉の無い枝に尾よりも頭を下げて止まりますが、それは貴著二つ折り判の『イギリス動物学』の中で画工が上手に画いている姿勢の通りです。…その鳴き声はちょうどネコが喉をゴロゴロと鳴らすように、音を出すために作られた気管の部分の力によって器官が刺激されて生じることは、全く疑いの余地がないように思われます。…これらのヨタカの中の1羽がやってきて、その小さな藁で覆われた小屋の上の十字架に止まって鳴き始め、何分間も鳴き続けたのです。その小さな動物の発声器官が動くと、小屋全体が人が知覚できるほど震動することに気づいて私たちは皆驚きました。[ペナント宛第22信]

ヨタカの動きを克明に追い、特徴ある鳴き方はどのようにして出されるのかを微細に描写して余す所がない。

2. 古典の素養からにじみ出る教養

『セルボーン博物誌』にはさまざまな古典からの引用が適切になされる。その範囲は動物学や植物学、地質学などの博物学の専門書に限らず神学、ギリシア、ラテン、またイギリスの文学に及ぶ。ギリシア古典からの引用はそれほど頻繁ではないが、ホメロス (Homer)、ヘシオドス (Hesiod)、エウリピデス (Euripides)、オッピアーノス (Oppian)、そして当然のことながらアリストテレス (Aristotle) も引用されている。ローマの古典からの引用は多く、ホラティウス (Horace)、オウィディウス (Ovid)、ウェルギリウス (Virgil)、ルクレティウス (Lucretius)、セネカ (Seneca)、マルティアリス (Martial) の適切な詩文の一節がホワイトの豊かな記憶の中から次々に出てくる。古典の著作者を引用するという習慣は大して重要なことではない。なぜならば当時の学者は手紙を書くことをまじめに考え、難なく、ためらうことなく古典から引用したからである。ギリシア語、ラテン語の韻文がその英訳と共にホワイトの筆から口をつくようにして出てくるが、ホワイトは決して術学的になることはなく、教訓的になることもない。この好感の持てるホワイトの態度が、古典の素養のない人にも『セルボーン博物誌』に近づくことを可能にしていよう。

ホワイトが英文学に及ぶ範囲は該博な知識から取捨選択して引用している、と言うほうがよいであろう。聖書は外典を含んで適宜使われているが、多くはない。直接の言及がない時でさえも聖書の影響は感じられる。ミルトン (Milton)、トムスン (Thomson)、ポープ (Pope)、ドライデン (Dryden) がホワイトの最も好む詩人である。チョーサー (Chaucer) と『農夫ピアズ』 (*Piers Plowman*) とは賞賛されており、シェイクスピア (Shakespeare) はホワイトの印刷された著作では4回だけ引用されている。

次にミルトンからの引用を具体的に見てみよう。「ハトの大群にセルボーンで会い、もしも夜、ねぐらの木で突然目を覚まさせられたらハトはどうするか」としてミルトンの『失樂園』 (*Paradise Lost*) から引用する [ペナント宛第44信]。

Their rising all at once was like the sound
Of thunder heard remote. . . . (Book II, ll. 476-477)

彼らが突然立ち上がるのは
遠く聞える雷鳴のようであった…。 (第2巻476-477行)

この『失樂園』の一節は、鳥とは直接関係がなく、地上の軍勢が、遠くで鳴る雷の轟きにも似た音を立てて、にわか立ち上がる様子を述べたところだが、ホワイトはそれをハトの大群が羽音も高くバタバタと急に飛び立つ様を描くの引用している。これは正に的確で見事な引用と言うほかはない。

セルボーン辺りの冬の旅鳥に関してバリングトン宛第1信で17種類を挙げ、これらの鳥で夜鳴くものはわずかだとしてナイチンゲール、モリヒバリ、スゲヨシキリの3種を挙げている。ナイチンゲールには 'In shadiest covert hid.' (非常に暗い茂みに隠れていた。) というミルトンからの引用が注記されている。

バリングトン宛第9信での次の引用は、その前段でワシ、コウノトリ、ツルのような大型の鳥、また後段でナイチンゲールのような小鳥などについて語っている箇所からのものである。

. . . rang'd in figure wedge their way,
. . . and set forth
Their airy caravan high over seas
Flying, and over lands with mutual wing
Easing their flight. . . (Book VII, ll. 426-430)

…形を整えて楔形に進み、
海の上高く空ゆく隊商の列を
見せて飛び、
互いの翼を休めながら
陸の上を越えてゆく…。 (第7巻426-430行)

バリングトン宛第9信は鳥の渡りについて記しているものだが、ホワイトは当時ジブラルタルに住んでいた弟ジョンからの情報に基づいて、ツバメ類の渡りについて述べている箇所にミルトンが上のように引用されている。イングランドから大陸に渡り、地中海を越えてジブラルタルに到着するツバメの長距離の渡りに関連しての引用である。

ホワイトは『四季』(*The Seasons*)を書いた同時代の詩人トムスンに「自然界の出来事の正確な観察者」と呼び、「博物日誌」の中に『四季』から9箇所引用している。『セルボーン』には1箇所の引用しか見られないが、ホワイトがトムスンのことをしばしば「自然詩人」と呼んで言及していることから、ホワイトが『四季』をよく読み、その内容を熟知していたことが容易にわかる。

ベナント宛第8信でホワイトは、ウルマの森に三つある大きな池の一つについての事

柄で逸してはならないこととして、夏の暑い日盛りに池の水辺に来る牛がどのようにして相当な時間をそこで過ごすのかを、興味深く記している。牛の落とすたくさんの糞が昆虫のすみかとなり、その昆虫が魚の餌となると記し、ホワイトはこう続ける。「このようにして、優れた経済家である自然はある動物の気晴しを他の動物の命の支えにしてしまう」と、自然の生態系の素晴らしさに感心している。「自然界の出来事の正確な観察者であったトムソンは、この心楽しい出来事を見逃さなかった」として『四季』から引用する。

A various group the herds and flocks compose :

... on the grassy bank

Some ruminating lie ; while others stand

Half in the flood, and, often bending, sip

The circling surface.

(*Summer*, ll. 485-489)

さまざまに群れなせり牛と羊と、

——草生い茂れる土手の上に

あるはかみ返しつつ横たわる。あるは立ちて

半ば水につかり、しばしば身を屈め、

取り巻ける水すすり飲む。

(『夏』485-489行)

引用されたトムソンの詩行はホワイトの観察内容そのままの描写である。トムソンの詩が無韻詩であることから、時に誇大な用語になってしまうという難がある、とホワイトは批判をしてはいるけれども、『四季』は美しい詩で正確な描写と見事な道德上の考察に満ちている、と大いに評価している¹⁾。

3. ホワイトの文章のリズムと調子

ホワイトは詩には押韻が必要だと考えていた。その理由として「押韻はそれ自体耳障りで中世風のものである…。しかし…現代〔18世紀—筆者注〕の言語は語尾と語形変化とからくる美しさを欠いているので、何かそれに代るものが必要だ²⁾」と言う。したがって、ホワイトは無韻詩よりも押韻詩を好み、巨匠の持っている「主題に韻律を適応させたり意味に音を共鳴させたりする能力」を評価し、ホメロスとウェルギリウスとはこの能力を完全に備えており、数あるイギリスの詩人の中ではドライデンを最大の巨匠としている。そのドライデンについてホワイトは次のように言う。ドライデンはウェルギリウスの作品を翻訳したが、原作者が感じず、意図することもなかった韻律、音の美しさを英語に表現した。ウェルギリウスの翻訳におけるドライデンの巧みさはその直喩表現にある、と。ペナント宛第44信には、ウェルギリウスの『アエネーイス』(*Aeneid*)のドライデン訳の引用がラテン語の原文と共に並べられているが、ここではドライデン訳のみを示すことにする。この書信でホワイトはモリバト、ヒメモリバト、

イエバトなどのハト類について記し、岩の中の洞穴に巣を造っているハトについて詠むウェルギリウスを引用している。

As when a dove her rocky hold forsakes,
 Rous'd, in her fright her sounding wings she shakes ;
 The cavern rings with clattering :—out she flies,
 And leaves her callow care, and cleaves the skies :
 At first she flutters :—but at length she springs
 To smoother flight, and shoots upon her wings.
 一羽のハトが岩間のすみかを捨てるとき、
 目覚まされ、驚きながら音高く羽ばたく、
 洞穴にはカタカタと音鳴り響く、一ハトは外へ飛び出で、
 羽毛のまだ生えそろわぬ雛を後に残し、空を切って飛ぶ。
 初めは羽ばたきながら一しかしついにはぱっと飛び
 滑らかな飛行に移り、矢のように飛ぶ。

ドライデンは基本的に弱強五歩格で英訳し、二行ずつ押韻している。翻訳者としてのドライデンのこのような想像力に富む能力を、ホワイトは褒め、「能力に磨きをかけ過ぎた」と批判もしている。

ホワイトはこのように韻律に非常な関心を抱いており、自分の書く文章においてもリズムと音楽性を重視し、実践している。ホワイトは「手と目だけではなく、耳を使っても書いた³⁾と評される所以である。ホワイトは文章のバランスをとり、用いる語を音楽的に並べることに巧みであった。ホワイトは言わば言葉の目利きで、明快に、平明に表現できる語を好んだ。短い平凡な名詞と適切な形容詞の中に、未熟な人では努力しても発見できないような温い色合いを見出していた。短い形容詞を重ねる例を挙げれば、‘The blackcap has in common a full, sweet, deep, loud and wild pipe’（「ズグロムシクイは共通して音量豊かで、調子が良く、太くて大きく、また野性的な声をしています」[ペナント宛第40信]）、‘Wolmer is nothing but a hungry, sandy, barren waste.’（「ウルマはやせた、砂質で不毛の荒地にすぎません。」[ペナント宛第9信]）という具合である。初めの例では五つもの形容詞を重ね、二番目の例では三つの形容詞を用いている。ホワイトの形容詞の使い方は無駄がないが、使い惜しみをしているわけではなく、上の例のように使う必要のある場合には日常的な形容詞をいくつも重ねている。用いられる一連の形容詞はそれぞれの確で、決定的なものであるから、簡単にどれかを無しで済ますという訳にはいかないものである。

描写に用いる語を扱うのにホワイトは器用であった。それを明らかに示す例を引く。

Mole crickets ‘begin to solace themselves with a low, dull, jarring note’（ケラは「低

くて鈍い、きしるような音を立てて自らを慰め始める」[バリントン宛第48信]。)

The eyes of the Chinese dogs are 'jet-black, small and piercing' (中国産の犬の目は「真っ黒で小さく、鋭い」[バリントン宛58信]。)

'...the shrilling of field-cricket, though sharp and stridulous, yet marvelously delights some hearers, filling their minds with a train of summer ideas of everything that is rural, verdurous, and joyous.' (・・・コオロギの甲高い鳴き声は鋭くて耳障りなのですが、不思議なことにある人々はこれを聞いて喜び、田園の、緑したたる、喜びに溢れた夏の諸々の連想で心が満たされるのです。[バリントン宛第46信])

三つの要素のある描写をすることをホワイトは大変好んだ。そして時々いくつかの対になった一連の形容詞を使うことで記述に変化をつけ、単音節語あるいは三音節語を挿し挟んで単調になるのを避けている。それは次のハヤブサの形態とアヒルの鳴き声について述べている所の例でよくわかる。

its breast was plump and muscular; its thighs long, thick, and brawny; and its legs remarkably short and well set: the feet were armed with most formidable, sharp, long talons... [D. B., LVII]

その胸はふくよかで筋肉がよく発達していました。腿は長くて太く、筋骨たくましいものでした。また、脚は著しく短くて引き締まり、足には極めて恐ろしい、鋭くて長い爪を備えていました・・・[バリントン宛第57信]

the quack of the female is loud and sonorous, the voice of the drake is inward and harsh and feeble, and scarce discernible. [D. B., XLIII]

雌のアヒルのガーガーという鳴き声は大きくてよく響くのに、雄のはこもった耳障りな声で、か細く、ほとんど聞き取れないのです。[バリントン宛第43信]

これまで見たように相応しい形容詞が適切に、またリズムと音楽性を意識しながら使われているが、それと同じように名詞は平明で普通のもが使われ、組合わさって快いイメージを描かせる。次に挙げるのはカヤネズミの小さな巣とその中で生まれる子ネズミについての記述である。

It was so compact and well filled, that it would roll across the table without being discomposed, though it contained eight little mice that were naked and blind.

[T. P., XII]

巣は非常に固く締まっており、中身もよく詰まっていたから、中にはまだ毛が生えず目の開いていない8匹もの子ネズミが入っていましたけれども、テーブルの上を転がせば壊れずにコロコロと転がったことでしょう。[ペナント宛第12信]

They breed as many as eight at a litter, in a little round nest composed of the

blades of grass or wheat. [Ibid.]

カヤネズミは、草あるいは小麦の葉片で作った小さな丸い巣の中に、一腹8匹もの子を産みます。[同上]

4. ホワイトの性格と研究態度

ホワイトは穏やかな性格の持主で、謙虚で礼儀正しく、また率直であった。その明確な筆跡から見ても几帳面であることがわかる。文通相手のペナント、バリングトンに対しての態度は、自分の観察して得た情報を提供し、相手の知らなかったことを教えている場合にも、偉ぶったところは少しもない。それどころか「たまたまお役に立つような情報があれば、教示的態度になりましたことをお赦しくださることと存じます」[ペナント宛第40信]と非常に謙虚である。

自然研究（博物学研究）の基本的態度としてホワイトは、自然は時間をかけてじっくりと観察すべきものであり、調査旅行に関しても決して動き回るだけの旅行になってはならない、と考えていた。そのことはスコットランドの調査旅行から帰ったばかりのペナントに宛てた第26信に見られる。そして自然界は非常に充実しているから、詳しく調査された地域からは多くの動植物が発見されている、と述べている [ペナント宛第20信]。このように謙虚なホワイトは、虚心坦懐は博物学者の要件であるとし、レイ (John Ray) はこの才能を顕著に備えていた偉大な博物学者だと讃えている。そして「然るべき確信に基づいて過ちを認める用意があれば、それが完全へと通じる道なのです⁴⁾」と率直であることの大切さを述べている。

自然研究で類推に頼ることはいかに危険であるかを承知しており、観察に基づく事実の蓄積から結論を出すという実証主義を貫いた。ただ例外的に、ツバメが11月という遅い時期まで留まっているという疑問を解決しようとして、類推して考えなければ説明がつかないと、ホワイトは苦衷を率直に述べている [ペナント宛第26信]。新種の同定に関しては標本を手に入れて在来種とよく比較して慎重に行うべきであり、単に記憶によって比較するという周到さを欠いた方法では誤りを犯すと、イタリアのスコポリ (Giovanni Antonio Scopoli) の論文を読んで批判している [ペナント宛第32信]。このことに関連して、ホワイトは次のように言い、自らの研究態度を明らかにしている。「筆者は野外の博物学者、すなわち他人の著作からではなく、対象そのものから知識を得ている者であることを公言しています」[バリングトン宛第1信]。

ホワイトの情報は地元で観察できる狭い範囲のものに限られているから [ペナント宛第27信]、他所での研究者の観察結果を情報として提供してもらうことを望んでいた。地方に住む人々が動物、特にその生活、習性、行動を日々観察してくれることは博物学の生命、精髓であると考えていた⁵⁾。そのために研究者や観察を行っている人と情報交換のための文通を楽しみながら行い、無上の喜びとしていた。ホワイトは言う、「私たちの文通を継続させるような出来事はすべて、私にとって常に楽しく、喜ばしいものとなりましょう」と [ペナント宛第44信]。情報は村の農夫からも貰い、標本は村の子供

から貰うこともあった。しかし、自分の身近に博物学の研究に刺激を与え、注意力を鋭くしてくれるような人のいなかったことは身の不幸であった、とホワイトは嘆いている [ペナント宛第10信]。けれども、これはペナントのような当時有名な博物学者と情報交換のための文通が出来ることが嬉しくて、それまで秘めていた愚痴が思わずこぼれたものと思われる。

野外での観察は時間をかけて根気よく行ったので、ホワイトは自分の観察内容に自信を持っていた。これについてホワイトは次のように言う。

For many months I carried a list in my pocket of the birds that were to be remarked, and, as I rode or walked about my business, I noted each day the continuance or omission of each bird's song; so that I am as sure of the certainty of my facts as a man can be of any transaction whatsoever. [D. B., III]

何ヶ月もの間、私は観察すべき鳥の一覧表をポケットに入れて持ち歩き、馬や徒歩で仕事に出掛ける際に、それぞれの鳥がまだ鳴き続けているか否かを、その日その日に書き留めました。ですから私は自分の提示した事実の確かなことを、人がいかなる行いについても確信を抱き得ると同様に、確信しております。[バリントン宛第3信]

動物分類学者は最低限のことを記述し、二、三の異名を並べることで良しとしている傾向があるが、それは自分の書斎ですべて出来ることだからだ、とホワイトは批判する。そして動物の生態と行動に関しては野外で観察し、考察すべきものであって、書斎で行われる性質のものではないことを力説して次のように言う。

the investigation of the life and conversation of animals, is a concern of much more trouble and difficulty, and is not to be attained but by the active and inquisitive, and by those that reside much in the country. [D. B., X]

動物の生態と行動の調査ははるかに多くの困難と苦勞を伴うものであり、積極的かつ好奇心の強い人、および地方に多く住んでいる人を除いては成し遂げ得ないことだからです。[バリントン宛第10信]

これぞ正に野外での観察者ホワイトの真骨頂と言うべきであろう。

5. 結 び

『セルボーン博物誌』は時代を超え、国境を越えて読まれてきたが、その理由、すなわちこの博物誌の魅力についていくつかの観点から考察してきた。魅力の第一は多年にわたる観察に基づく生彩ある描写にある。形や色だけでなく、音を交えて観察の事実を描く文章は生き生きとして読む人の想像力を刺激する。ホワイトが自らも詩作し、押韻

詩を好んだことから解るように、用語法、とりわけ形容詞、名詞の使い方が適切かつ巧みで、文章は律動的、音楽的である。美辞麗句を連ねるのではなく、形容詞、名詞は平明で日常的なものを多く用い、文章は明快である。それには二人の博物研究者に宛てた書簡体の文章であるということが作用していようし、またホワイトが音読を重視していたということから、音楽性に対する優れた感覚の持主であったことが基本的に寄与していると考えられる。ホワイトは手と目だけではなく、耳を使っても書いたのであった。

次には、ホワイトが野外の観察を重視し、根気よく多年にわたり観察を続け、観察によって知り得た事実を基にして結論を出すという実証主義の研究者であったことが大きい。そして『セルボーン博物誌』がただの観察記に終わっていないこととして挙げられるのは、ホワイトの古典の教養が深く、各所にギリシア・ローマの詩人、また多くの英文学の作品から詩句が的確に引用されて、文章に英知の香りを漂わせていることである。さらに、ホワイトの性格が穏やかで率直、謙虚であるということがある。その人柄からくる、生きるものに注ぐ眼差しの温さがその文章から感じ取れる。その文章はヒューマーと詩的なものが微妙に入り混じって読む人の心に語りかけ、想像力を刺激し、驚異に満ちた自然の世界へと誘うところが、この博物誌の大きな魅力となっている。

注

* 『セルボーン博物誌』からの引用には R. M. Lockley 編の *Everyman's Library* 版を用いた。

- 1) Holt-White, R., *The Life and Letters of Gilbert White of Selborne* (John Murray, 1901), vol. 1, p. 284.
- 2) *Ibid.*, p. 283.
- 3) Johnson, W., *Gilbert White : Pioneer, Poet, and Stylist* (John Murray, 1928), p. 280.
- 4) B. Sharpe's Edition of "Selborne," vol. 1, p. 94.
- 5) *Ibid.*, p. 119.

参考文献

- 1) Greenoak, F. ed., *The Journals of Gilbert White*, 3 vols. (Century Hutchinson, 1986).
- 2) Hinde, T., *A Field Guide to The English Country Parson* (Phoebe Phillips/Heinemann, 1983).
- 3) Hudson, W. H., *Far Away and Long Ago* (Dent, 1939).
- 4) Lockley, R. M., *Gilbert White* (H. F. & G. Witherby, 1954).
- 5) Mabey, R., *Gilbert White* (Century Hutchinson, 1986).
- 6) Rye, A., *Gilbert White and his Selborne* (William Kimber, 1970).
- 7) ノラ・バーロウ編, 八杉龍一・江上生子訳『ダーウィン自伝』(筑摩書房, 1972).
- 8) 門井昭夫「不滅の自然探究者」(『イギリス文学グラフィティ』愛育社, 1978).
- 9) 門井昭夫「ジェイムズ・トムソンの『四季』とギルバート・ホワイト」(『英米文学評論』1981年春季号).
- 10) 門井昭夫「ギルバート・ホワイト孤愁の日々ーリチャード・メイビー『ギルバート・ホワイト伝』を読む」(『英米文学評論』1988年冬季号).

Abstract

Gilbert White's *The Natural History of Selborne* has been read for many years since its publication in the late 18th century. What does the fascination of *Selborne* lie in? The purpose of this paper is to consider the matter with quotations from White.

Firstly, White's detailed and vivid descriptions of what he watches appeal to the readers very much. White calls himself a field naturalist, and is never a naturalist who considers scholarly fancies in his study. White describes life and behaviour of birds, animals and insects so vividly as to stimulate the imagination of his readers. He makes his words the verbal counterpart of what he actually saw and heard.

Secondly, White's style is simple and clear. The sentences go along smoothly. He employs such melodious and well-chosen words as make his sentences rhythmical and tuneful. The beauty and grace of his diction are mainly due to the possession of a glorious gift he wisely and studiously developed.

Furthermore, the wide range of his general reading gives his prose the fragrance of wisdom with quotations from Roman and English poets.

Key Words : White, Gilbert

The Natural History of Selborne

natural history

18th century